

第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」講演会①

登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ



講師：渡辺 賢二

資料館展示専門委員
元法政二高教諭

2021年3月20日(土)
13:00~14:30

明治大学生田キャンパス

かつてこの丘には、陸軍の〈秘密戦〉のための兵器を開発する **陸軍登戸研究所** があった。



明治大学生田キャンパス

所在地: 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1



明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡



弥心神社(現 生田神社)と登戸研究所跡碑



陸軍消火栓



〈表面〉
動物慰霊碑
篠田鏐 書

〈裏面〉
昭和十八年三月
陸軍登戸研究所建之

動物慰霊碑 (小池汪氏撮影)

明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡



通称「弾薬庫」(倉庫)

旧登戸研究所本館前のヒマラヤ杉



戦後も残っていた登戸研究所の建物



1947年GHQ撮影の航空写真(国土地理院所蔵)

戦後も残っていた登戸研究所の建物



1960年代の木造建物群(吉崎一郎氏撮影)

戦後も残っていた登戸研究所の建物



1966年 旧本館前(吉崎一郎氏撮影)

戦後も残っていた登戸研究所の建物



電波兵器の開発をおこなっていた47号棟

1. ごく一部の人しか知らなかった 陸軍登戸研究所（戦前）

1) 知っていた人は？

- ① 参謀本部と関係部局、天皇ならびに皇族
- ② 陸軍科学研究所の担当部局
- ③ 陸軍中野学校の関係者
- ④ 陸軍登戸研究所に勤務していた人、囑託になった人
- ⑤ 陸軍登戸研究所と関係した特務機関、憲兵

2) なぜ、知られていなかったのか？

① 秘密戦のための研究所だったから

〈秘密戦とは〉

- ・ 防諜・諜報・謀略・宣伝をいう

〈防諜・諜報の機材〉

- ・ 無線機材、盗聴機材、秘密インク、秘密カメラ、変装機材、犬迷い剤など

秘密インキ

インキ { 食塩・のり
薬剤 { アスピリン・その他



現出法



〈謀略の機材〉

- ・ 要人殺害用の各種毒物（青酸ニトリル、蛇毒など）
- ・ 火炎瓶、毒ガス、毒入りチョコ、細菌兵器（植物を枯らす細菌・牛を殺す細菌）、偽造紙幣など

〈宣伝の機材〉

- ・ 和紙をコンニャク糊で貼った気球を使った伝単、特殊拡声器など

登戸研究所第二科は1943年4月に軍功により
陸軍大臣から陸軍技術有功章を授与された。



陸軍技術有功章徽章(表)

② 軍の法規でも消されていた

- 陸軍の技術研究所は技術研究所令で定められ、「第一条、第一技術研究所……」などとなっていたが、なぜか「第九条、第十技術研究所……」とされ、第九技術研究所は消されていた。

したがって「陸軍登戸研究所」としかいいようがなかった。

こうした例は、

学校の場合の「**陸軍中野学校**」も同様であった。



三笠宮の陸軍登戸研究所視察(1944年)

3) 大本営・参謀本部は、この研究所に大いに期待していた

①「秘密の中の秘密」であった偽造紙幣による作戦

- ・現代戦は武力戦だけで勝利することは難しい。日本の傀儡政権をいかに作るかが大切となる。日本は柳条湖事件という関東軍の謀略から始まる満州事変と「満州国」建国によって中国東北部に地歩を得たが、日中戦争でも同じことを試みた。それが傀儡南京政権（汪兆銘政権）の樹立であった。

- 中国政府（蒋介石政権）の法幣制度は米英の支援で確立（1935年）したばかりで、紙幣印刷工場も香港やラングーンにあった。
- そうした経済体制の弱さをつかんで、本格的な経済戦としての偽造紙幣作戦を展開。

- 1942年には、**香港から中国紙幣の原版を接收**し、登戸に持ってきてそれで製造した。
- 総額45億元製造し、35億元使用。
- 軍事物資を購入したほか、戦費にも活用した。
- 中国政府は米英の支援で高額紙幣を作って偽造紙幣の価値を下げて応戦。



五号棟

五号棟は偽札(偽造法幣)
が印刷された工場とされ
ている。



上からみた五号棟

2021/3/20



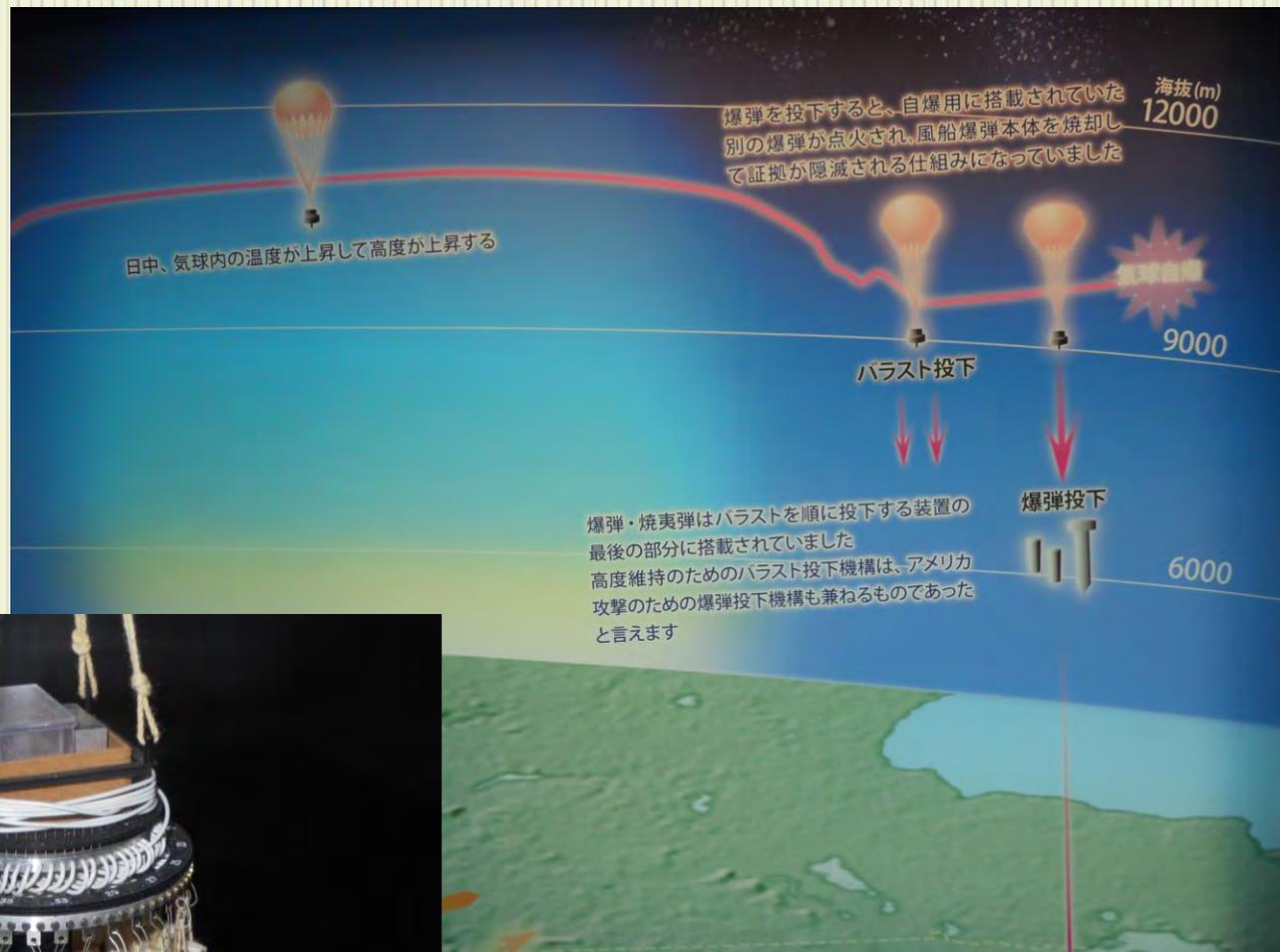
六連偽札

② アメリカ向けの風船爆弾作戦

- ・アメリカ向け「決戦兵器」として風船爆弾を開発
- ・気象研究者、電気関係研究者、紙・糊などの化学研究者などが動員され、和紙をコンニャク糊で貼った10メートルの気球を作り、高度維持装置でアメリカまで届くものを開発した。
- ・爆弾部分には、細菌兵器を搭載する研究・開発・製造した。
- ・実際は、焼夷弾を搭載した謀略兵器として9,300発打ち上げた。うち、1,000発くらいがアメリカに届いた。



風船爆弾満球テストのようす(林えいたい氏提供)



高度が低下するとパラストを自動的に投下して浮力を回復する。

資料館第二展示室のパネルと模型

2021/3/20

2. 戦後も秘密にされた 陸軍登戸研究所の実相

1) 陸軍による証拠隠滅

- ① 陸軍省は1945年8月15日早朝、
証拠隠滅命令を発した。
- ② 陸軍登戸研究所に勤務した人も、
暗黙のうちに秘密厳守が求められた。

2) 冷戦下、アメリカによる資料提供を求める動き

① 秘密戦・謀略戦関係者の戦犯免責

- ・戦後すぐに米軍の調査と資料提供要求の動きがおこった。サンダースレポート（1945年11月）、トンプソンレポート（1946年6月）、フェルレポート（1947年4月）、ヒルレポート（1947年12月）など。
- ・陸軍登戸研究所や731部隊の関係者が尋問されたが、最終的に戦犯免責と引きかえに情報を提供した（帝銀事件が起きた年、1948年）。
- ・陸軍登戸研究所の関係者はすべて公職に復帰、一部の関係者は米軍の要員になった。

3. 市民・高校生が明らかにし、 明大がまとめた陸軍登戸研究所の実相

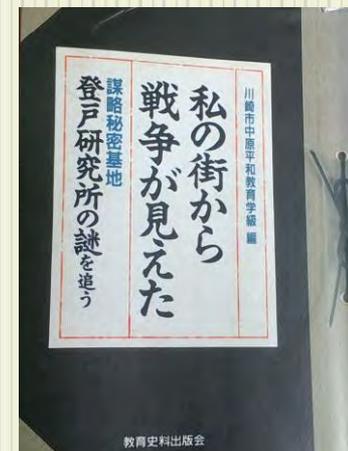
1) ジャーナリストによる問題提起

- ・ 松本清張氏、斉藤充功氏らによる摘発

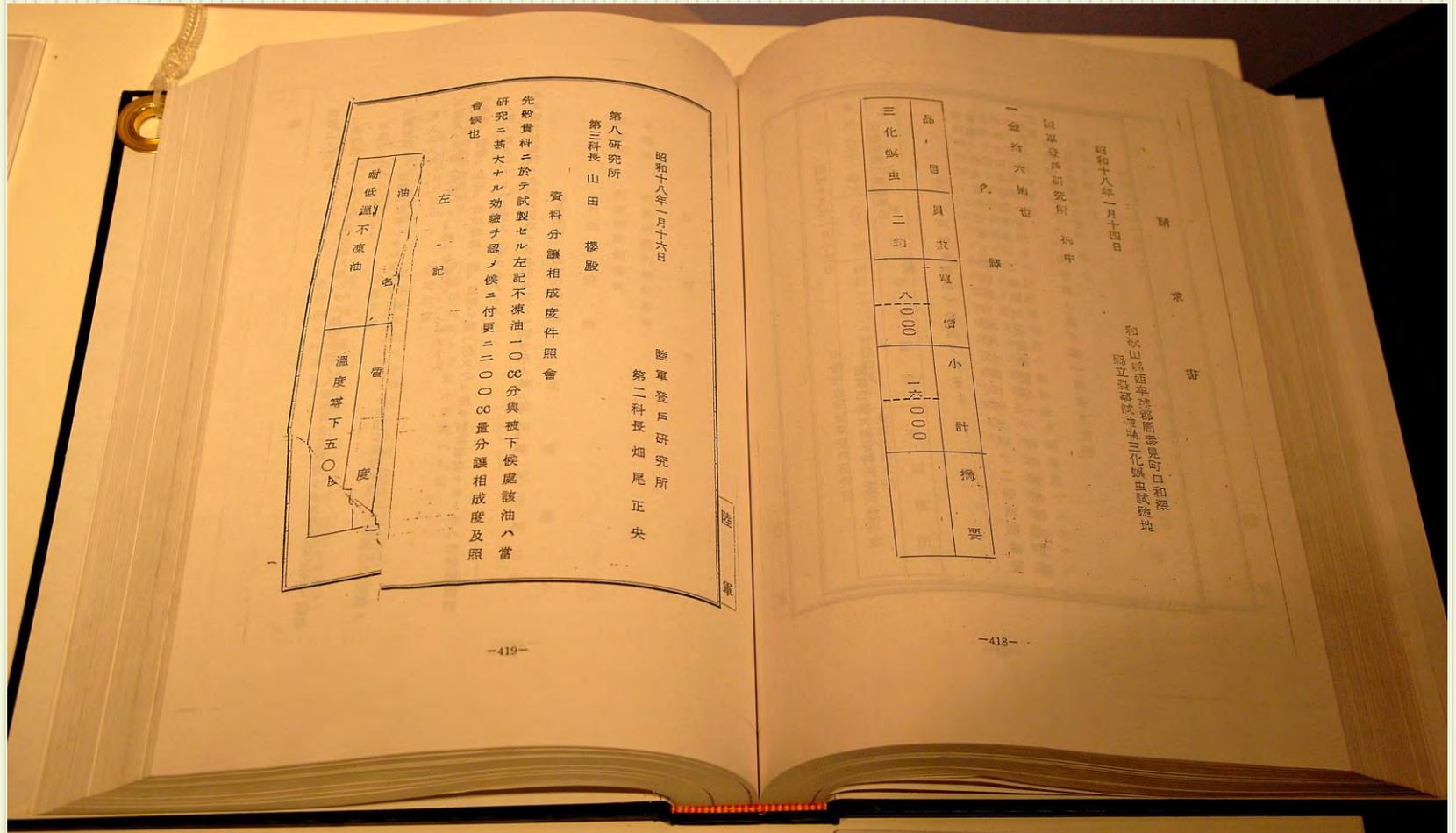
2) 市民・高校生の取り組みの決定的意義

① 市民が動く時、大切なものが発掘された。

- ・ 川崎中原平和教育学級が取り組み、
同じ地域に住む人から情報提供を受け、
『雑書綴』という貴重な資料を発掘した。



『雜書綴』（複製）資料館所蔵



昭和十八年一月十六日
 陸軍登戸研究所
 第二科長 畑尾 正央

第八研究所
 第三科長 山田 稔殿

資料分譲相成度件照會

先般貴科ニ於テ試製セル左記不凍油一〇〇〇分與被下候處該油ハ當
 研究ニ甚大ナル効驗ヲ認メ候ニ付更ニ二〇〇〇分譲相成度及照
 會候也

左記

油 耐低温不凍油
 温度零下五〇度

昭和十八年一月十四日
 陸軍登戸研究所 兵中
 一 金 給 六 兩 也

和歌山縣田原郡田原町和歌山
 設立並奉試製三化螟虫試驗地

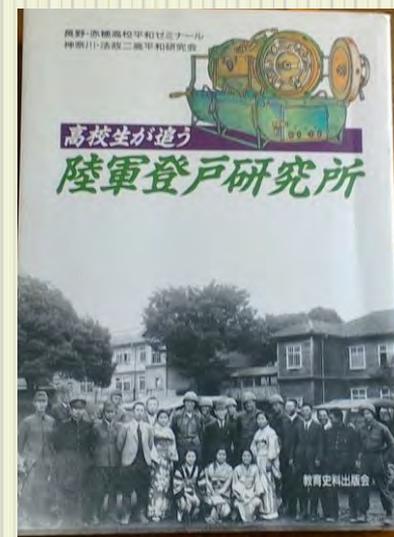
品目	数量	單位	小計	摘要
三化螟虫	二釘	八〇〇	一六〇〇〇	

② 高校生が登戸研究所関係者の重い口を開かせた。

- ・「大人には話さないが、
君たち高校生には話そう」

③ 高校生の発想がもたらした 陸軍登戸研究所保存・活用の意義

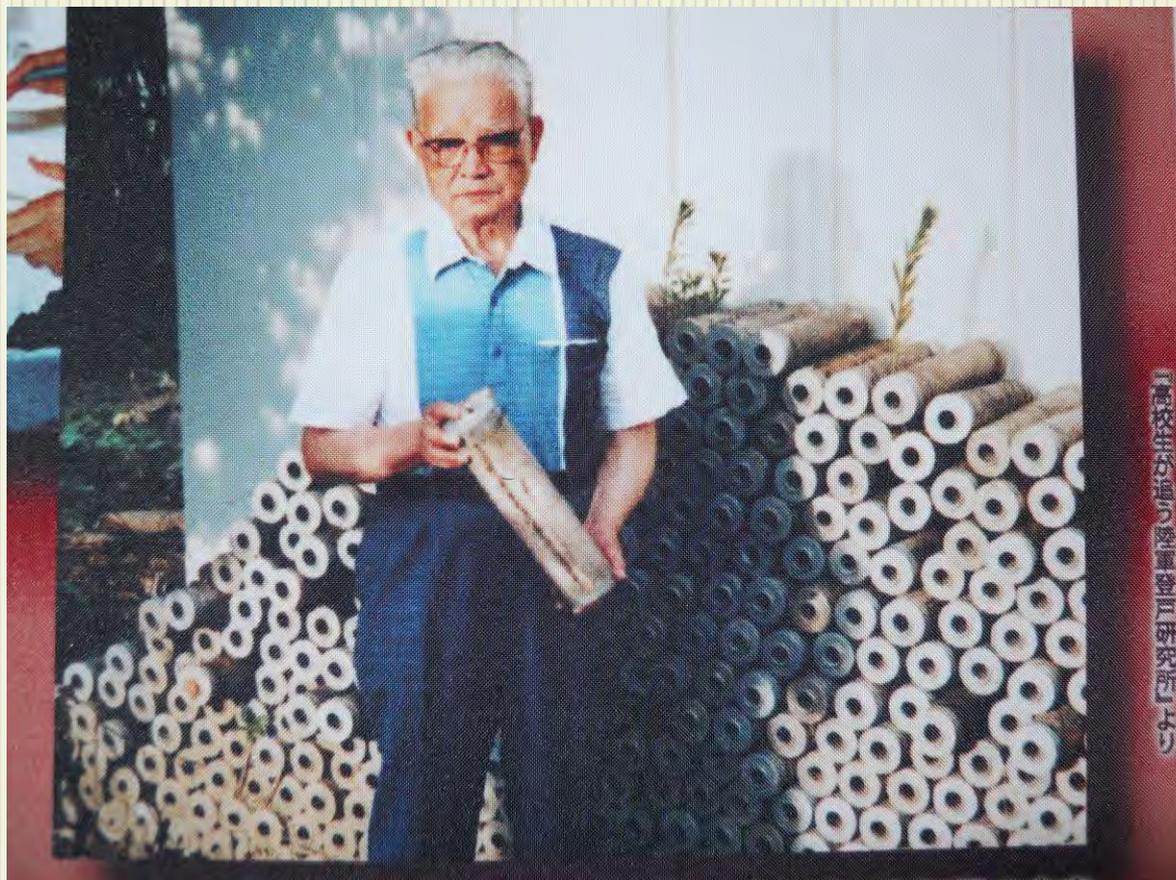
- ・「戦争と平和はそんな遠い関係ではない。
私たちの生き方と関係する。」
→ 石井式濾過器の濾過筒の発掘と
それへの思い。





高校生の聞き取りに応じる伴繁雄氏

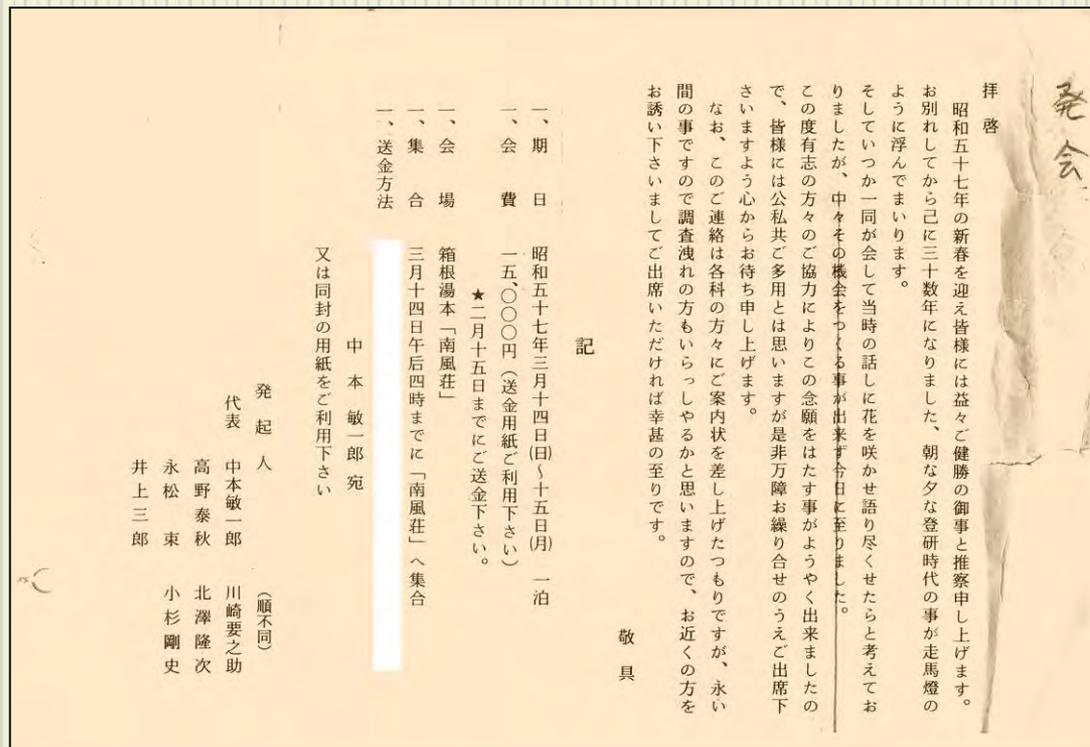
伴繁雄氏宅（長野県駒ヶ根市）にあった濾過筒



4. 「登研会」の結成と果たした役割

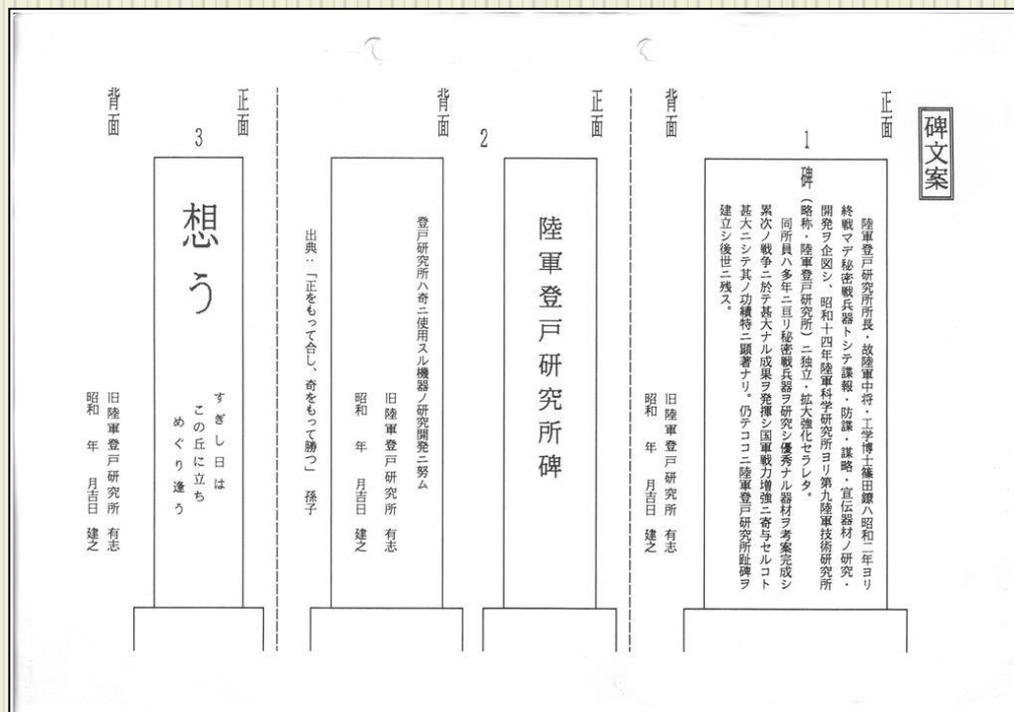
1) 「登研会」はいつ結成されたか

1982年に第一回登研会が開催される

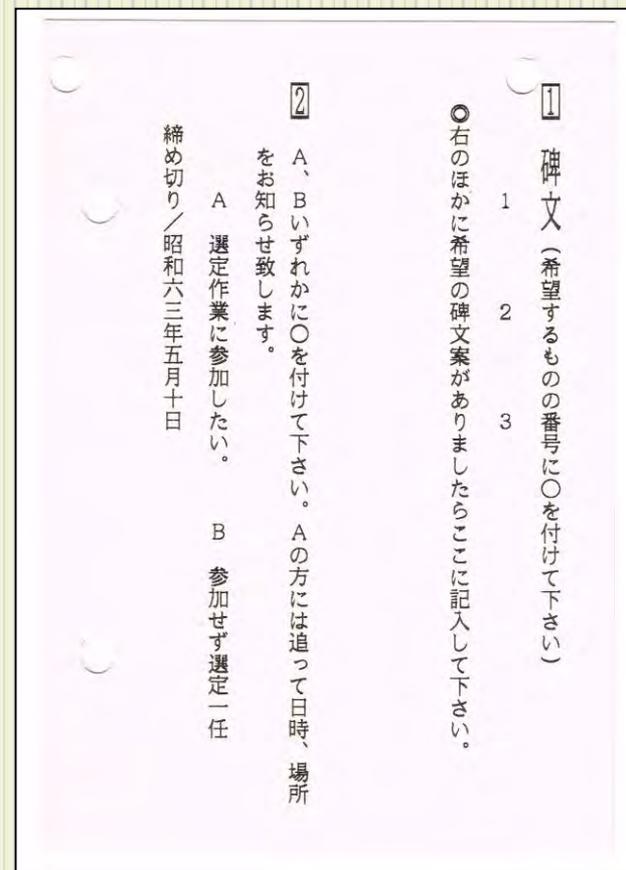


第一回登研会案内状
(講演者所蔵)
※企画展で展示中

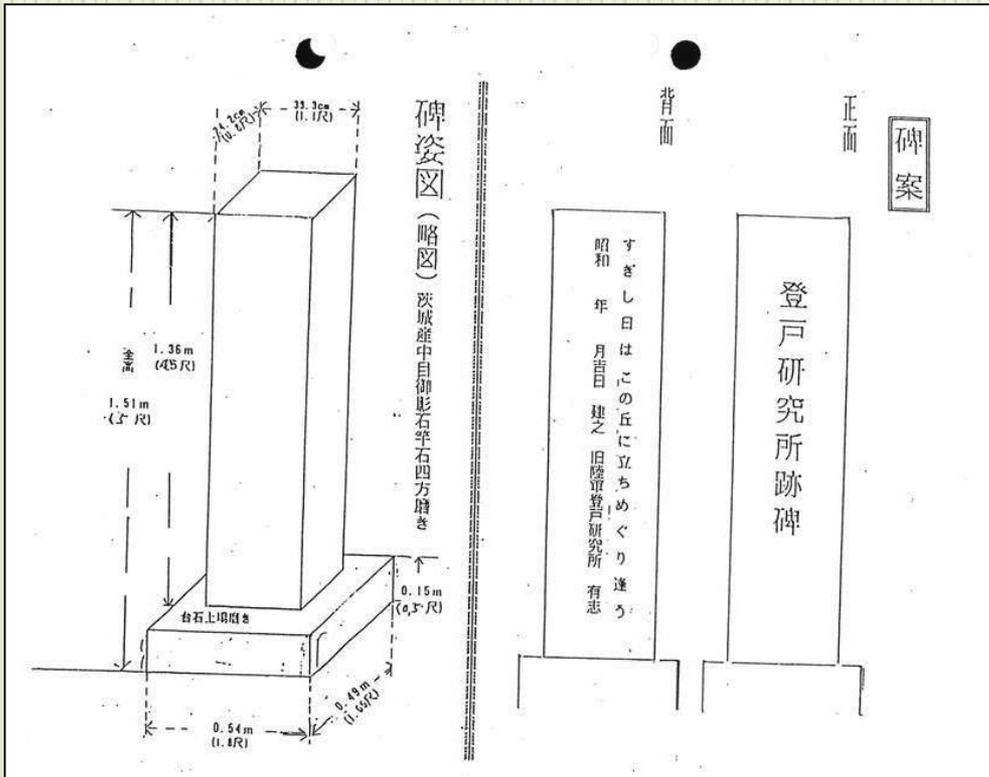
2) 1988年～1989年「登戸研究所跡碑」建立



跡碑 碑文案(講演者所蔵)
※企画展で展示中



碑文アンケート(講演者所蔵)
※企画展で展示中



跡碑除幕式
(1989年撮影、資料館所蔵)

登研会が明治大学に
提出した跡碑姿図と案
(明治大学所蔵)
※企画展で展示中

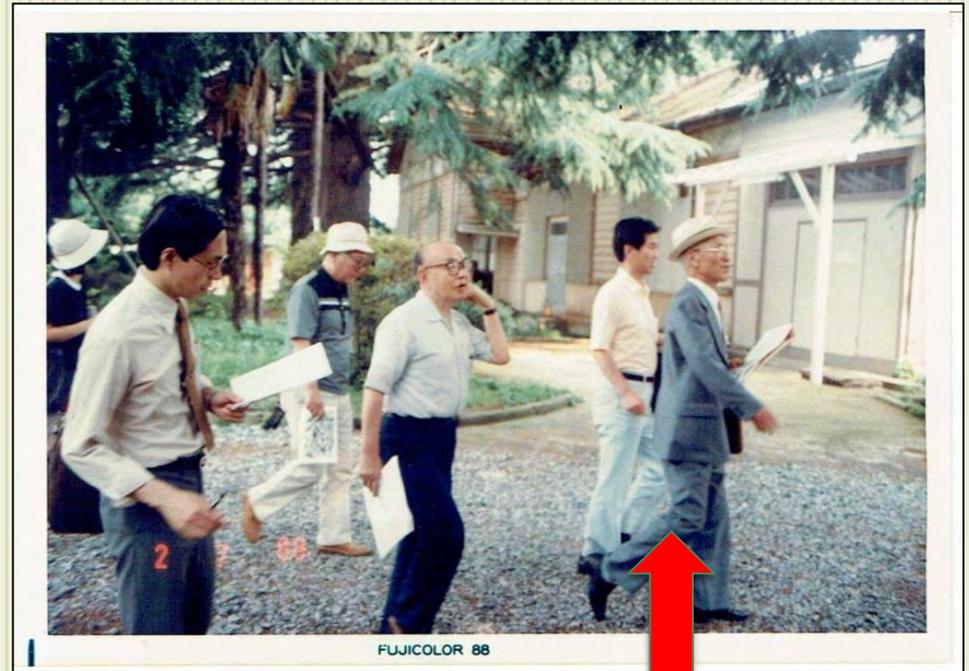
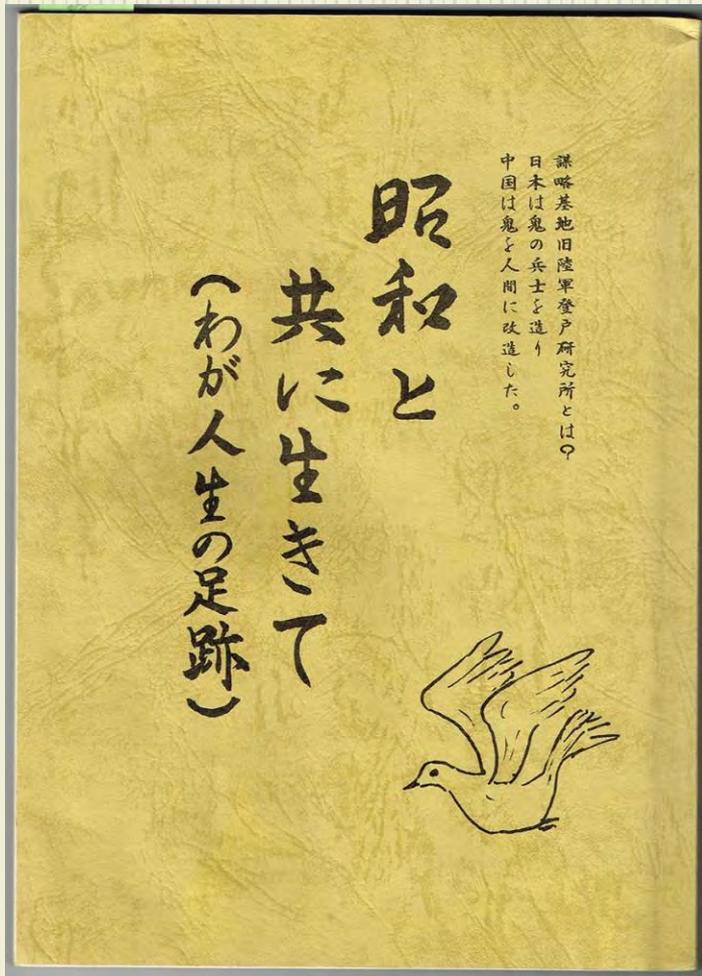


跡碑(2020年撮影)



跡碑 碑文面
(2020年撮影)

3) 語りだした関係者

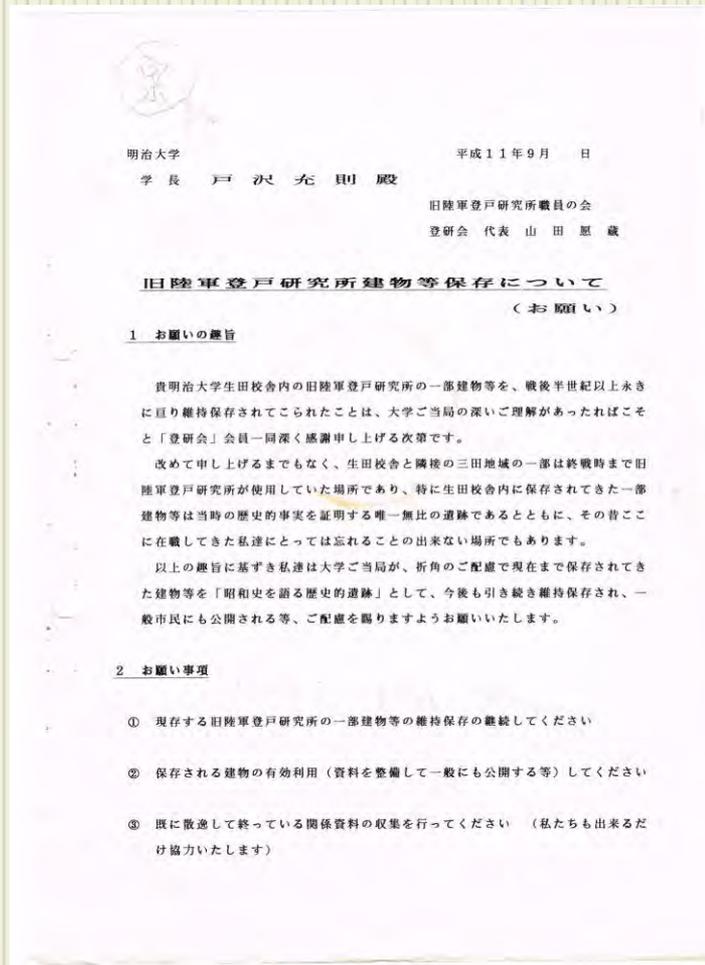


川崎市民とともに登戸研究所掘り起こしを行う和田一夫氏(1988年撮影、個人提供)

和田一夫氏が自身の戦争体験をまとめた手記
『昭和と共に生きて』1994年(資料館所蔵)※企画展で展示中

4) 明治大学に登戸研究所遺構の保存と活用を求める

① 1999年、登研会が明治大学に保存と活用を求めた



1999年当時の明治大学学長に宛てた
旧登戸研究所建物保存要望書
(講演者所蔵) ※企画展で展示中

2021/3/20

②2005年、登研会は改めて明治大学に保存・活用を求める

→明治大学は賛同し、
資料館設立へ

昭和13年12月～昭和15年7月(半年9ヶ月)
我が青春時代の第1研究

H 17.10.30

山田 愿蔵

陸軍登戸研究所跡の保存と資料館設置の要請

明治大学
納屋廣美学長殿

現在の明治大学生田校地には、戦時中にご承知の通り、陸軍登戸研究所がありました。

私たちは、その陸軍登戸研究所に勤務していました。そこでは、参謀本部直属で秘密戦のための兵器の研究・製造が行われていました。第一科では、物理的な兵器、第二科では生物化学兵器、第三科では経済謀略兵器、そして第四科では大量生産が可能となった兵器の開発・製造を行っていました。

厳重な秘密保持のため、私たちは、ここで何をやっていたのかを家族にも話しませんでした。

戦後も秘密保持が求められたため、この研究所は、まだまだ秘密のベールに包まれています。

戦後六〇年たった今日、あの戦争の風化現象が進んでいます。私たちが行っていた研究や製造した兵器について何一つ明らかにされないまま埋もれようとしています。私たちの歴史そのものが消し去られようとしています。

私たちは、例え、当時は秘密の研究所であっても事実は事実として残り、歴史の審判を受けるべきだと考えています。そこで、以下の点をご要請します。

記

1. 陸軍登戸研究所当時の遺跡をできるだけ保存していただきたい。
2. 陸軍登戸研究所当時の資料を展示・公開することができる資料館をつくっていただきたい。なお、この点に関しては私たちは当時の資料の提供など、ご協力いたします。

平成17年10月30日

登研会

代表 山田愿蔵



2010年3月、第二科の建物(36号棟)
を資料館に

2005年当時の明治大学学長に宛てた
旧登戸研究所建物保存要望書
(資料館所蔵)※企画展で展示中

2021/3/20

5.市民の保存・活用を求める動き

1) 2006年、市民によって

「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会」
が結成される。

→計9,803筆の旧登戸研究所建物保存の要望署名を
集め、2007年に川崎市議会へ提出

6. 明治大学の 保存・活用を求める動き

1) 明治大学の動き

- ① 1995年から明大として学術調査と保存・活用の方向性確認。
- ② 2006年、保存と活用の方針を決め、2010年3月、「明治大学平和教育登戸研究所資料館」を開設。



資料館開館セレモニーのようす
(明治大学広報課撮影)

第二科の建物（36号棟）を資料館に（2010年3月）



2) 資料館が開館し改めて実感したこと

- ① 70年間沈黙していた元勤務員の来館
→ 「ほっとした」と涙ぐんで語った
- ② 中・高校生、大学生が大勢訪れた



- ③ 登戸研究所を通じた平和教育を海外に向けても発信できた

7. 今後の課題

～大学・行政・市民の連携による
文化遺産へ

1) 「負の遺産」を、平和を創造する文化遺産に

→ 2019年 第1回川崎市地域文化財に選ばれる



2) 歴史教育・平和教育・科学教育の発信・受信の場に

- 若い人が最近は多く来館。
今も高校生が調査を継承している。

【主要参考文献】

- 斎藤充功『謀略戦 ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社、1987年）
- 木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994年）
- 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年、新装版2010年）
- 海野福寿・渡辺賢二ほか編『陸軍登戸研究所—隠蔽された謀略秘密兵器開発—』（青木書店、2003年）
- 『駿台史学』第141号〈戦争遺跡の検証と保存—登戸研究所資料館の開館によせて—〉（明治大学駿台史学会、2011年3月発行）
- 山田朗・渡辺賢二・斎藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』（芙蓉書房出版、2011年）
- 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（2012年、吉川弘文館）